

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子 南品川保育園
施設所在地	東京都品川区南品川5-3-10 ミヤデラビル2階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

日常の中にはたくさんの音がある。子ども達は、色々なところで音を感じる。面白いと思うと音を出してみる。足踏み、手拍子、物を叩いて鳴らす、先生の弾くピアノの音を心地よくきく、歌を歌い音を楽しむ。楽器遊びをして、色々な楽器に興味を抱いている。そんな姿から音について探求した活動をしていきたく「音」をテーマにした。

2. 活動スケジュール

7~8月 身近な音探し：保育室内や散歩先で音探しをする。音への興味を広げる。

8/4 わくわくライブ1回目：プロの演奏を聴き、楽器によって音の違いを知ったり、音が重なると楽しい、おもしろいということに気づき、自分たちも音を出したり、リズムに合わせて体を動かすことを楽しんだ。

8/18 音の広場：種類の楽器を購入。プロの演奏家に楽器を使った音の出し方を教えてもらう。楽器の使い方（演奏）だけでなく音を使った遊び方を教えてもらうことで演奏や音の楽しさを知る。

新しい楽器を子どもが常時触れられる環境を作ることで、子どもたちの中で音楽の楽しさが広がっていき、保育室の中で楽器を使った演奏や、遊びの様子が増えた。

10/3 わくわくライブ2回目：プロの楽器演奏に合わせて、みんなで歌ったり、手拍子をしたりと、自分たちが発する音を使って演奏に参加し、音楽の楽しさをさらに深く知る。

10~11月 保育の中での楽器遊び：クラスの中で購入した楽器を使って、自分たちで音を出して合奏したり、音遊びをすることで、音楽の楽しさを感じる。

11/27 ワークショップ：全身を使って音に合わせて自由に表現し、楽器を正しく演奏するだけでなく、音楽を楽しむことを体験した。ワークショップをきっかけにして、楽しく合奏することを知り、子どもたちが自分たち自身で楽器を手取るようになり、自由に音楽を楽しむことができるようになった。

12月~1月 合奏の練習：発表会に向けて合奏の練習を重ねる。保育者による、やらされている練習よりも子どもたちが自由に楽器を選んで演奏するようになり、より子どもたちが主体的に発表会の練習に取り組んだり、楽しみながら取り組む姿が見られるようになった。

1月 発表会で演奏する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・外部のプロによる演奏・楽器指導として、演奏会の実施（2回）・音広場の取り組み（2回）・保育士、2歳児から5歳児までワークショップの参加（5回）等の実施
- ・楽器の購入（なかひよしリズムスタンド、なかよしリズムパンダ、トーンチャイム、フルーツアソートシェーカー、ザイロホーン ソプラノ、ザイロホーン アルト、ザイロホーン バス、ザイロスタンド、グロッケン、ベルハーモニーデスク、ベルハーモニーデスクケース、スクールサウンドボックス、長胴太鼓十字平置き台セット、締太鼓セット）
- ・鍵盤ハーモニカ、すず、たんばりん、トライアングル（園に既存であった楽器）

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

7~8月 身近な音探し：普段は音に対してあまり興味や関心をもつことはないが、音探しをしてみようと働きかけていくことで、自然と子どもたちが周囲の音や、外の音に注意して観察するようになり、音への興味がどんどん深まっていった

8/4 わくわくライブ1回目：知っている歌でもそうでない歌でも、演奏を通じて子どもたちが自然と体を動かす姿が見られた。子どもたちが音に興味を持つ姿に、集中して取り組んでいる姿が見られる。

8/18 音の広場：楽器を手に取る、自由に演奏する、友達と交換する。大人が働きかけなくても子どもたち自身でかかわりを持つようになり、音楽を楽しむようになった。

新しい楽器を子どもが常時触れられる環境を作ることで、子どもたちの中で音楽の楽しさが広がっていき、保育室の中で楽器を使った演奏や、遊びの様子が増えた。

10/3 わくわくライブ2回目：喜びとともに参加する。前回あまり歌えなかった園歌を歌いたいという気持ちで毎日子どもたちが練習に取り組み、当日の演奏会でプロの演奏家と一緒にライブで歌うことができた。子どもたちも練習に取り組んだことで自信になり、担任も感動する歌を披露した。子どもたちは前回圧倒されて聞くだけだった状況から一転し、歌を覚え、声や手拍子といった体を使った音出しで演奏会に参加した。

10~11月 保育の中での楽器遊び：クラスの中で購入した楽器を使って、自分たちで音を出して合奏したり、音遊びをすることで、音楽の楽しさを感じる。楽器遊びでは、子どもたちから「色々な楽器を使ってみたい」という声が上がったため、保育の中で様々な楽器を使った演奏会ごっこを行った。

11/27 ワークショップ：プロが来園し、リトミックのように全身を使って音に合わせて体を動かし、楽器の演奏を楽しむというよりも、音楽に合わせて自由に自己表現をする活動を行う。普段は楽器の演奏に苦手意識を持っている子どもたちもいるが、これまでの音楽活動を通じて、楽器の演奏に興味をもったり、苦手意識がなくなったりする姿が見られるようになった。その理由として、楽器に自由に触れる環境作りや触れる時間を特別に定めないとというルールにして、子どもたちがより楽器に興味を持ち、思いのままに表現することを楽しめるようになったことが挙げられる。

1/31 発表会 各クラス、演奏する内容は様々だが、楽器を使用して演奏を楽しんだ。4歳児は拍が違う叩き方をして、それぞれのパートを他のパートに重ならないように、音を聞きながら演奏していた。緊張の面持ちでも最後はやり終えた笑顔になり、達成感を味わえた。5歳児は、楽器も鍵盤ハーモニカやトーンチャイムを使用して、演奏をやり遂げた。トーンチャイムも鍵盤ハーモニカも今年から始めた楽器であったが、皆音の美しさに惹かれて園奏することを楽しんでた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

身近な音探しでは、保育室内や散歩中に聞こえる音に耳を傾け、「隣の部屋からも話し声が聞こえてくるね」、水道の水を出すと「じゃあじゃあって聞こえる」、「いろんな車の音が聞こえるね」と様々な音に気付き、保育者や友だちに共有していた。「身近な音探し」活動を通じて、子どもたちは普段気にしなかった隣のクラスの声などの外部の音に耳を傾けられるようになり、自分たちで音を探して友達に教え合うなど、音への興味が深まった。この活動が、単に音を聞くだけでなく、音を探求し、共有する自発的な行動につながった。

わくわくライブでは、知っている曲があり、歌を口ずさんだり、自然とリズムに乗って身体を動かしていた。2回目のわくわくライブまでは期間があったので、歌った曲を毎日練習した。曲も前回と同じ歌が多く、歌える歌が増え、自信を持って歌うことができ、保育者も感動するほどだった。手拍子で参加するだけでなく、楽器を1人ひとつ持って歌に合わせて自由に演奏することができ、「いろんな音がするね」「カスタネットってこう使うだね」等、楽しそうに会話をし、より音への興味が深まっていく。プロの演奏に合わせて歌ったり手拍子をしたりすることで、音楽への興味がさらに深まり、子どもたちが音楽の楽しさを深く体験できた。ライブでの集中力と学習意欲の高まり ワクワクライブの1回目では、子どもたちが約1時間の演奏会に誰一人として私語をせず集中して参加し、興味があることには時間を関係なく集中できるという新たな気づきがあった。ライブの2回目に向けて、子どもたちは以前歌えなかった歌を毎朝の会で熱心に練習し、その成果として自信を持って演奏に参加し、担任も感動するほどの歌声を披露することができた。

ワークショップでは、楽器を使った活動ができることを知り、ワクワクした様子で活動に入る。初めてやることも多かったが、説明をよく聞き、活動に積極的に参加する姿が多く見られる。音の強弱に合わせて歩く速度を変えたり、止まったりと体を使って音楽を楽しんでいた。トーンチャイムを使った活動では、3～4人ずつに分かれて行ったので「きれいな音がするね」等、音の違いを感じ、思ったことを保育者や友だちと共有する。自分の好きな楽器を鳴らしたり、楽器の音の違いを感じ、同じ楽器の友だちを見つけると「同じだね」と嬉しそうにする。この活動を通じて、子どもたちは楽器に対して苦手意識を持つことなく、自分の鳴らしたい時に鳴らしていいという自由さを体験し、楽器を扱うことへの抵抗感が薄れたと感じた。ワークショップでの体験をきっかけに、子どもたちは「正しく合奏する」ことよりも「楽しく合奏したい」という気持ちを持つようになり、自分から楽器を手に取って合奏の練習を始めた。以前は合奏練習を嫌がる子もいたが、この変化により、子どもたちは自分の役割や、みんなで合わせる楽しさを理解し、練習にも意欲的に参加するようになった。

楽器遊びでは、外部からの指導ではなく、子どもたちの自発的な要望に基づいた活動を行うことで、音楽の楽しさがさらに広がり楽器遊びを楽しむ姿が見られた。

タンバリン、すず、トライアングルを使った活動では、「タン うん」のリズムで交互に音を鳴らし、音の重なりや合奏することの楽しさに気付く。楽器を演奏していく中で「発表したい」「保護者にも演奏を聴いてほしい」という気持ちが芽生え、発表会で合奏を披露することにした。子どもたちが主体的に取り組み、楽しみながら練習をしている。楽器がすぐに手にとれる環境にすると、いたずらに楽器を鳴らす事がなく、音に興味を持って、楽器の音や鳴らし方に自ら工夫をして探求する姿が見られるようになった。強弱のつけ方など、自分で体験して行う事や、友だちの鳴らす音を聞くことで子ども達が自ら工夫して音の大きさや鳴らし方を考えていた。きれいな音が出たり、思ったより大きな音、小さな音がでると、子ども同士で音を聞き合い楽しむ様子があった。保育士が感心すると、鳴らし方を説明してくれ、できる事が増える楽しさを味わっていた。発表会の練習では、自主的に練習する様子もあった。皆で演奏を成功させたいという思いが伝わり、練習を嫌がる様子はなかった。みんな、楽しんで練習をして音の奏でる合奏を楽しんでいた。トーンチャイムでは、音がならないチームがあると視線をやり、番がきたことを目くばせで知らせる様子も見られた。自分のパートだけでなく、他の子どもの奏でる音も聞きながら演奏する様子が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

最初は音への興味はあまりなかったが、保育者の言葉掛けから子ども達が音に興味を持ち、自らたくさん音を探していた。音は探す楽しさ、友だちと探したものを言い合う楽しさから、自らたくさん音を探そうとする姿が多く見られた。音は生活の音、体を使って自ら作る音、楽器の音と、音の種類が沢山あることに気づいた。わくわくライブに参加しプロの演奏を目の前で聴いたことで、音の大きさにびっくりしたり、弦楽器など聞いたことのない音などを体験してことで、「いろんな音があって楽しかった」「小さいピアノ(鍵盤ハーモニカ)がやってみたい」という声があり、実際に演奏してみたいという気持ちが芽生え始める。普段は初めての活動に対して少し身構える様子がある中で、音の活動は初めてでも「もっとやりたい」と前向きな姿勢で取り組む姿が多く、子どもたちが興味を持って意欲的に活動していることが子どもの笑顔や真剣な態度から読み取れた。楽器の演奏ではただ楽器を鳴らすだけでなくリズムに合わせて交互に鳴らし、曲に合わせて行うことで、音の重なりを楽しみながら活動を行っていた。みんなで合奏することも大切だが、友だちの演奏を聴くことで楽器の違い等に気付くことができていた。そこから「保護者にも聴いてほしい」という子どもたちの声が上がリ、発表会で合奏をすることにした。発表会に向けた合奏練習に、子どもたちが主体的に取り組み、楽器ごとにリズムを教え合いながら意欲的に練習に取り組んでいる。音の活動を通してクラスのみならず、協同性や豊かな感性と表現等の10の姿も育っていることを感じた。今はまだ、簡単な合奏だが、常に楽器に触れる事で楽器演奏のハードルがさがり、練習もやらされ感ではなく、みんなに聴いてほしいから練習しているため、次年度にはさらに合奏の楽しさを感じながら発表ができると期待している。発表会で緊張しながらも、普段の楽器遊びや探求から自信を持って演奏できた。子ども達は緊張していたと言っていたが、楽しかったとも言っていた。スタッフは子ども達の頑張りを感じていた。音楽を奏でる楽しさが練習の大変さを克服して達成感を味わう事ができた。楽器演奏という集大成を終えても、各クラス積極的に楽器を使用して活動を繰り返し、さらなる音の探求や演奏の楽しさを実感して探求している。苦手意識の克服と自発的な活動への移行になる活動だった。以前は楽器演奏に苦手意識を持つ子どもが多かったものの、制限を設けずに楽器に触れる時間を多く取ったことで、「やらなきゃいけない」という意識から「やりたい」という自発的な意識に変化した。この変化が、楽器が身近な存在となり、子どもたちが本当に音楽を好きになるきっかけになった。保護者のみなさんには、この活動をわかりやすく伝えるため、各クラスドキュメンテーションを作成して、毎回の活動報告を行った。また、楽器を保育室や事務所の廊下に面した場所に配置することで、降園時などに、親子での会話のきっかけにもなっていた。色々な楽器に触れる事で子どもも保護者にこんな楽器があると話しをしたり、またやりたいと話している姿もあり、音の探求から楽器の探求へと子どもの興味関心が広がった。毎年発表会をする中で、担任も子どもにも楽器指導などをする中で、子ども自らが音や楽器、合奏に興味を抱いてくれた事で活動にも力が入り、経験年数の浅い保育士も子どもと一緒に音を楽しむことの大切さを学べた。次年度も音って楽しいという表現の領域が充実したものになると期待している。